



真中

森 理和



*1*  
*1999 ~ 2003*



切り株に目をうばわれし空凍てる



少年のはじらひ見えし雛祭

山櫻ほころぶ一枝絵巻物



安らぎの醫師のまなざし矢車草

青空に身をなげだして初夏とおもふ



梅雨晴れや団子つくりの水たまり

砂糖とけ琥珀の梅の暑気ばらい



日焼けした肩にきらきら貝の砂

漁火のほつほつ秋の残照に



山茶花や娘二十才の薄化粧

栗ごはん鬼皮渋皮味の内



屋根裏を鼠の走り小雪ふる

朝の庭てんと落つ郁子の種



甘酒を温め直して針仕事

午後四時に出會った秋日レーニン像



病む鶏の冠を撫でし鬼は外

少年のさりげなく入る雛の部屋



幼蟲のごとむくむくと藤の花

一茶がにぶらせ蠅叩打ち下ろす



叔母ひとり土間に屈みし田の青さ

波に追はれ波を追ふ犬波に吠ゆ



廢屋や向き向きに咲く菊高し

飛行機雲空眞二つに冬立てり



草の花 生けて慰安婦寫真展

伊豫柑をむけば手を出す子の居りて



澤庵をつまみし外は五月晴れ

廢棄場太きホースで打ち水す



西瓜の種溺れかけたと子の話す

犬しきり少年に飛びつく秋の海



幼な兒の無心に摘み取る猫じやらし

山姥の髪とも芒全開に



鹿も猿も流れてゆけり羊雲

空稻架や長く影ひく農夫の背



稲架薄く農の後手鎌光る

熟し柿嘴の鋭く齒科醫機器



巨峰剥く爪のむらさき指相撲

萩の実に業師のごとく雀群れ



渋柿の居残り坊主うなだれて

母の家立ち去りがたし万年青の実



飾り焼く海老と縄目と残りをり

父と子の棒切れの会話牡蛎雑炊



森羅万象積りし雪のまるみなす

逆さ絵を写す水田の千人針



梅雨空を犬小屋の犬ながめをり

紫陽花を持ちて少年登校す



朝市のとうもろこしの虫大きい

ふる里の朝市で食ぶ今川焼



丸ごとのトマトかじりし朝の市

「味みれよ」朝市の梨みづみづし



朝の市おまけしとくよ疵の梨

げんごらう銀にも光り八甲田



秋あかね手にも肩にも八甲田

タンカーの底まで見せて颱風去る



冬めきし仏の顔して静寂に

長男に微笑残し冬逝ける



小春日に散髪せるは三日前

藁ぼつち後見のごと寒牡丹



抹消の  
手続き  
終へし  
寒雀

桜草の  
父の  
畳に  
影長し



幾本も太きつららの一軒宿

春スキー滑らずひとりハーブティー



雀  
ほ  
ど  
燕  
来  
る  
村  
理  
髪  
店

額  
の  
花  
モ  
デ  
ル  
顔  
し  
て  
鶏  
歩  
く



こはごはと樋に近づき夏落葉

大屋根に魚の骨と夏落葉



三斗小屋百有余年月明り

湯の流る沢を好みて秋の蛇



木戸の釘少し浮きをる花八ツ手

押花のごと蜂の死す霜柱



彩りのハンガーばかり鴉の巢

フライドポテト一度は吐きて池の鴨



大見得を切りしままなる守宮かな

ビーバーにスキー滑らす富士雪溪



大文字草長いレンズの黒光り

鳥威透明人間ここに居り



古き宿秋の草花  
そこここに

牧水の好みし  
新酒いただけり



谷川や叫び幾百秋の雪

照葉峡車止めさす狐をり



2

1994 ~ 2006

餌を銜へ一度振りむく狐の目

枯れかかる野草を僅か犬食めり



湯の小屋の階段のぼる秋の猿

樹氷林まつすぐ崖へ獣道



樹氷  
林空の  
青さを  
ひとり  
占め



熊眠る頭と尻尾わからずに

春の象飼育の人を後追ひす



春の蠅バクが  
瞼を少しあけ

デパートの箱より  
出でし兎の子



山吹の花も葉も食ぶ兎かな

タオル地をせつせと嚙んで兎の子



兔の子死んでるやうに横たはり

納戸から花嫁衣裳春の宵



梅雨寒し身分証明出す税吏

控へ目な税吏の口調梅雨しとど



額の花これこれこれと税吏指す

税吏去る湯呑重たく片手添ふ



駄菓子屋の菓子と並んで秋の猫

大判の布団ずり出す屋根の雪



風吹けば桶屋にあらず花粉症

山歩き一時忘れる花粉症



一粒の涙無言に大試験

春おぼろ生まれかはりし桐箆笥



蟻が引く青虫ぐわんと躬を反らす

温もりの残りし朝の豆腐買ふ



チエロ弾きがラフマニノフになる七夕

アウシユビツツへ旅した話日向ぼこ



「春よこい」よちよち犬へまっしぐら

初鯉身近になりしカルパッチョ



砂漠の冬ワイングラスにエアーズロック

富士嬉し芒の屏風草布団



海に浮く樹氷の林積乱雲

小春日や死体のポーズ飛行船



色  
付  
く  
も  
色  
付  
く  
前  
も  
烏  
瓜

罽  
りの  
変  
る  
が  
わ  
り  
に  
柿  
紅  
葉



道祖神ふんわり今朝の雪衣

紋黄蝶街行く夫の前うしろ



ちりいだしひとひらと花白拍子

医者へ行くことにしました柿若葉



糸屑の尾の揺れ確か目高の子

水色のステンドグラス揚羽蝶



同極の磁気を帯びたり目高の子

被はれし巨大マンシヨン雷走る



青空が底なしにする姫睡蓮

凌霄花ゆらゆらゆらり鬼瓦



い  
わ  
し  
雲  
く  
じ  
ら  
潮  
吹  
く  
鬼  
瓦

標  
本  
の  
蛾  
の  
動  
き  
出  
す  
ラ  
ン  
プ  
の  
灯



羊雲母をみつけて泣く泣く泣く

歩くやう流されるやう川の鴨



冬木立太極拳の身のこなし

初富士や真っ直ぐつづく中央線



ふる里の手厚くつつむ冬林檎

菜の花や地下の工事は高速道



若葉から若葉へ  
雫常夜灯

緑蔭や妊婦の服の  
ふくよかに



青田風農夫ゆるりと顔を上げ

青林檎確と方向定めたり



夏座敷大きなピアスの達磨の絵

昼月を横切るセスナかき氷



稜線の現像朝の霧霽れる

夕霧や俯き帰る観光馬



栗  
ご  
飯  
旅  
客  
機  
が  
ビ  
ル  
破  
壊  
せ  
り

秋  
の  
雨  
雉  
鳩  
抱  
卵  
し  
つ  
つ  
づ  
け  
る



根回りも流れも染めし金木犀

電話より山頂の声毛糸玉



大蠓螂眼は真緑に小町針

吊し柿蔵の窓から蔵の屋根



一位の実氏神様に人気無く

花びらのちりゆくさきを杉木立



柳の芽葉先はぴんと反り上る

啼いて啼いてそれでも啼いて鳥の子



てのひらに螢のひかりはずかしや

生後十月野火のごとくに這ひ回る





3

2003 ~ 2010

大枯野鷹が攫ひに来るを待つ

冬  
桜  
ふ  
り  
む  
か  
ず  
に  
は  
み  
ら  
れ  
な  
い



滝川の白に綾なす七竈

あの山へ行けたらいいな赤とんぼ



日向ぼこ犬のつそりと児を避ける

外海へ向けて大砲桜の実



靴  
そ  
ろ  
へ  
花  
絨  
緞  
に  
屍  
な  
る

鯉  
の  
ぼ  
り  
四  
男  
一  
女  
孫  
曾  
孫



星まつりいつも一つの願ひごと

山百合やバス停あればバスが来る



滝しぶき拳一つの目張鮓

小骨なら抜けもしやうに薯蕷汁



霧  
深  
し  
米  
粒  
ほ  
ど  
の  
草  
も  
み  
ぢ

踏  
切  
の  
警  
報  
の  
中  
冬  
毛  
の  
犬



犬が犬起きろ立てよと冬毛搔く

母恋の遠吠つづく冬銀河



墓大騒ぎして大真面目

節分草大型バスを列ねをり





3

2007 ~ 2010

坂  
道  
の  
鱗  
模  
様  
に  
紅  
葉  
雨

雪  
解  
け  
や  
熊  
胆  
に  
似  
る  
核  
燃  
料

春  
の  
水  
地  
球  
の  
裏  
へ  
旅  
立  
つ  
子



物音をたてない暮し梅漬ける

白玉や生あるものは疎ましく



シースルービル炎天に立つてゐる

羅針盤狂わすように曼珠沙華



吾亦紅憲法九条道標

蜚の闇へ闇へと生きつづけ



花  
八  
ツ  
手  
理  
屈  
嫌  
ひ  
な  
父  
の  
家

蓬  
干  
す  
白  
寿  
を  
目  
指  
す  
母  
の  
湯  
に



厳寒の海から  
椀へ布海苔かな

手話の輪の静かな  
笑みに風光る



風薫るフェンスを素通りする雀

念入りに代掻き済ませ旅立ちぬ



今年竹つんつるてんの半ズボン

ときめきのいつもかはらぬさくらんぼ



思ひ立つ金魚の一尾矢のごとく

鹿鳴くや橡の実スパツと三つに裂け



葉  
喰  
歌  
舞  
伎  
役  
者  
の  
母  
娘

皆  
が  
皆  
母  
を  
語  
り  
し  
牡  
丹  
鍋



山の風  
瞼を閉ぢて  
小鳥待つ

濁り酒  
またぎの  
人の物  
静か



冬の海煮干工場の跡広し

虎落笛関東平野の送電線



江戸の火事いくたび潜り二天門

浅草寺瓦七万糸柳



風花や一瞬間の無い世界

春風や作り始めし稲荷寿司



帰り路は散り初めをり谿桜

夕立や犬を案ずることもなく



十六夜や染屋に掛かる鮫小紋

房州団扇祖母の笑顔を思ひ出す



バ  
ラ  
ン  
ス  
の  
右  
へ  
左  
へ  
枯  
葉  
散  
る

ど  
こ  
か  
ら  
か  
花  
び  
ら  
二  
三  
池  
動  
く



満作や男の髭の不可解な

午後三時障子の端より出て行かれ



日脚伸ぶ骨董市にしやがみ込む

二の丸のがらんと広く長閑なり



猫柳それから先は知らなくて

妖怪はここには棲めぬ麦畑



おもひではいつもここまで氷水

その日から家族の真中風車



塵紙を丸めてぽいと木槿散る

みんなみやひとりぼっちのかくれんぼ



首振つて顔這ふ蟻を守宮拒否

池の水飲んで守宮の舌舐り



秋  
茄  
子  
嫁  
ぎ  
受  
け  
継  
ぐ  
塩  
の  
壺

雛  
の  
ご  
と  
温  
も  
り  
あ  
り  
ぬ  
露  
の  
臺



石垣の桜の陰に  
權休め

たんぽぽは球形の  
絮原一面



細波を葉裏に映す若楓

闇に羽化未明に蜻蛉乾ききる



牛蛙日なか間のびし声交す

若竹の小路ふはふは人力車



若竹の音を遮る小路かな

寝転んで少し近づくと星月夜



神無月日々若返る待ち合せ

兄弟で父の法要烏瓜



煤  
払  
ひ  
防  
空  
壕  
を  
残  
す  
寺

踏  
切  
か  
ら  
先  
の  
踏  
切  
諸  
葛  
菜



鬼は外脚のすくすく伸び盛り

一膳の炊き立てご飯春の雨



春立つやこまめにつける化粧水

石五つ飛んで渡つて春の川



春光や水草の沼ぽつと浮く

ガラス窓骨の音立て黒揚羽



起き抜けの夢さめぬまま蓮の花

朝すずし動かぬ亀の喉うごく



走馬灯上野不忍肩車

倒木にクリタケ森の音符かな



紅大根おもむろに土洗ひけり

花八手間合閑かに屋根を葺く



坪庭に午後の日幽か藪柑子

隣家に手筈残る十二月



見えぬ雨長閑な刻の美顔術

冬芽満つ石柱残る小学校



鴨の背借りて立ちたし向ふ岸

真中  
終



## あを叢書

著者 森 理和

発行日 2010年9月19日

発行人 佐藤喜孝

装丁 佐藤喜孝

発行所 竹僊房

〒164-0011 東京都中野区中央 2-50-3

電話 03-3371-4623

chikusen@haisi.com

### あを叢書について

二〇〇一年創刊の「あを」は今年で十周年を迎えました。これを記念してあを叢書とし電子出版することにいたしました。

この叢書はあを編集部のデータベースにある『あを』『飛行船』『獐』句会・吟行等のデータより作家各人が二百五十句抄出し発表年代順に一本にまとめたものです。